



Title	渡邊克昭先生のご退職によせて
Author(s)	岡本, 太助
Citation	大阪大学英米研究. 2024, 48, p. 19-21
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99598">https://hdl.handle.net/11094/99598</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 渡邊克昭先生のご退職によせて

岡本 太助

1985年に大阪大学言語文化部助手、1987年に大阪外国語大学講師として着任以来、40年近くにわたって本学における教育に尽力された渡邊先生のご退職に際しまして、教え子であり研究者仲間であり、ご在職最後の数年間は同僚としてご一緒させていただく幸運に恵まれた身として、多くの教え子を代表し先生との思い出を書き留めたいと思います。

渡邊先生の存在を初めてしっかり認識したのは、1990年代半ば、留年と休学を重ねながらもようやく3年生に進級できそうなタイミングでのことでした。アメリカ文学の主要な作家について英語で書かれた解説文を読むという授業を受講した私は、張りのある声で淀みなく流麗なレトリックを散りばめながらなされる解説に聞き惚れ、俄然アメリカ文学に興味を抱きました。鼻息荒く渡邊ゼミへの参加を申し込むも、選抜のための面接での先生の「ステイーヴン・キング？ あまり興味ないなあ」という一言であえなく落選（渡邊ゼミは常に希望者が殺到する人気ゼミなのです）。結果として翌年非常勤講師としてゼミを担当された貴志雅之先生のもとで演劇を学び始め、博士論文では小説と演劇の両方を取り上げるなど、研究者としての私のスタイルを確立できたのも、この挫折体験あつてのことです。後年、酒の席などで、「太助君を落としたことが悔やまれる」とおっしゃってくださり、逆に申し訳ない気持ちになったものです。また大学院入試では抜群の成績で合格するも、夜勤アルバイト明けの私に先生からお電話があり「単位が足りなさ過ぎて卒業できない」と宣告されたのも、雪化粧をほどこした今宮の交差点の風景とともに鮮明に記憶に刻まれています。

大学院入学以降は、引き続きご指導いただくとともに、学会シンポジウム

などで先生とご一緒する機会にも恵まれました。例えば博士後期課程在籍中に、異例のことですが、日本アメリカ文学会関西支部大会フォーラムにパネリストとして登壇し、その時に発表した内容を後に貴志雅之編著『二〇世紀アメリカ文学のポリティクス』（世界思想社、2010年）に寄稿しました。リチャード・パワーズの小説について書いたのですが、何と同じ本に渡邊先生もパワーズ論を寄稿されているではないですか。しかも同じ『囚人のジレンマ』です。目次を見た瞬間戦慄をおぼえました。「テーマは違うし、ええんちゃう？」というのが渡邊先生の談話ですけれど、編集された貴志先生も頭を抱えられたのではないのでしょうか。

当事者以外にとっては特筆すべきエピソードではないかもしれませんが、個人的には、ここに教育者・研究者としての渡邊先生のエッセンスがあるように感じます。アメリカ文学を学び始めたばかりの学生は、先生の博識とそのトレードマークである（と学生のあいだで囁かれている）有無を言わせぬ誘導尋問に気圧され、つい優等生的な答えを返してしまうことになります。これを知的な同調圧力と呼んでよいかもしれませんが、渡邊先生のクローンのようにになってしまうというのが、学生が一度は直面する通過儀礼であると言えます。けれどもここで先生が言外に込めておられたメッセージは、“Tell me something I don’t know”ということだったのではないかと後に思いいたりしました。期せずして実現した師弟対決で、ようやく同じ土俵に上ることのできた弟子に先生が胸を貸してくださったのであり、「それでいいんだよ」と背中を押してくださったのだと、今はそう思えて仕方ありません。

研究者としての先生のキャリアの大部分を傍で見て、そこから多くのことを学びました。ご退職され、先生の聲咳に接する機会が減ることは残念に思いますが、幸いなことに、先生の研究の集大成となる『楽園に死す——アメリカ的想像力と〈死〉のアポリア』（大阪大学出版会、2016年）が私たちには宿題として残されています。同書のあとがきには、とりわけ私が感銘を受けた以下のような記述があります。

作家たちは、樂園に潜む〈死〉の火口から不意に到来する謎めいた噴石を慈しみ、褶曲する溶岩の襞の中に、豊饒な「創造／想像」の鉞脈を発見したのである。本書の各章で取り上げた小説は、[……] アポリアのうちに折り畳まれた〈死〉の溶岩の襞を読み解こうとする標本だったと言えるかもしれない。こうした標本はいくら蒐集しようとも郵便の不安がつきまとい、噴煙を上げる火山の謎を決して総体として捉えることはできないかもしれない。だが、どれ一つとして同じ噴石がないように、ここにサンプリングされたテキストにはそれぞれ、奥行きと陰影に富むもう一つの樂園アメリカの歩き方が密かに聖刻文字<sup>ヒエログリフックス</sup>として刻まれている。「フィールドワーク」としてはまだまだ不十分なことは否めないが、それぞれのテキストの襞を、自分なりに心ゆくまで慈しむことができたのは研究者冥利に尽きる。

幾重にも折り畳まれた小説テキストの「襞」を丁寧を読み解く行為には終わりがなく、常に取りこぼしや読み落としがあるのではないかという不安にかられながら、私たち研究者は一枚また一枚とその襞をめくってゆくほかありません。しかしながら引用箇所では先生は「慈しむ」ということばを繰り返されています。一度は作家を主語に、二度目は研究者を主語に。文学にとり憑かれてしまったシーシュポスたる私たちにとっての希望は、まさにこの「慈しむ」ということばに集約されるのではないのでしょうか。つまるところ文学とは楽しいものだということを、私たちは先生から教わりました。文学テキストの幸福論とでも呼ぶべき渡邊先生思想は、その薫陶を受けた私たち一人ひとりの中にしっかり根を下ろしています。時に迷い、悩み、苦しみながら研究を続けてゆく私たちを、どうか今後もあたたかく見守ってください。